

左の記事を読んで後の問いに答えましょう。

- 1 空欄Aに入る中国の王朝名を漢字1字で書きましょう。

- 2 空欄Bに入る制度を書きましょう。

- 3 空欄Cに入る名前を漢字で書きましょう。

- 4 空欄線部Dに入る色を漢字1字で書きましょう。

\* 解答は2ページ、記事全文は3ページ

NIEワークシート中～高校

**A**が589年に中国を統一し、東アジアの情勢は大きく変化した。日本も6世紀末からの飛鳥時代に中央集権体制を整備し、603年に初めての位階制度「**B**」を定めた。冠の色による支配者層の階級表示で、高位から「徳、仁、礼、信、義、智」の序列にし、それぞれ大小に分ける。豪族を政府の官人として束ねるのを目指した。冠は絹製で、縁飾りの付いた袋状。文献に位階ごとの色を示す記述は見当たらないにもかかわらず、上から「紫、青、赤、黄、白、黒」とする説がある。国学の発達した江戸時代に、陰陽五行説に基づいて有力視された。仁以下は人の守るべき徳を表す「五常」であり、五行説では該当する色が「青、赤、黄、

## 飛鳥時代の冠の色

白、黒」である。よって各冠にこの五色を当てはめたもので、この部分は蓋然性が高い。ただ「徳」は五常になく、色を紫とする根拠もない。「日本書紀」には**B**施行期間に、蘇我蝦夷が蘇我**C**へ紫の冠を授け大臣の位になぞらえたところ。徳冠を授けられたのは遣隋使などときれ、強大な勢力を誇った蘇我氏が徳位と同色とは考え難い。十二階に分けられた官人たちの上に大臣らがおり、紫の冠をかぶったのだろう。**B**は647年に、「七色十三階」の冠位に改変された。位階を「織、繡、紫、錦、青、黒」として大小に分け、黒の下に「建武」があった。書紀はそ

## 支配者層の序列を表示

の服色や冠の素材などを詳細に記している。位階がどう移行したかには異説もあるが、「徳」は「錦」になったと考えられる。その服色は、鮮やかな**D**色である真緋。冠も同色とみられ、前身の徳冠も真緋であった可能性が高い。



ますだ・よしこ 1944年生

まれ、岡山県出身。

お茶の水女子大大学院修士課程修了。学

習院女子大名誉教授

で、国際服飾学会会長などを歴任

した。著書に「古代服飾の研究」

「日本喪服文化史」など、編著に

「日本衣服史」などがある。

## NIEワークシートのこたえ（2023年8月2日公開）

### ◆ワークシート「飛鳥時代の冠の色」

2023.8.1付 朝刊文化 解答

1 隋

2 冠位十二階

3 入鹿

4 赤

# ★権力表現の スナップショット

隋が589年に中国を統一し、東アジアの情勢は大きく変化した。日本も6世紀末からの飛鳥時代に中央集権体制を整備し、603年に初めての位階制度「冠位十二階」を定めた。冠の色による支配者層の階級表示で、高位から「徳・仁・礼・信・義・智」の序列にし、それぞれ大小に分ける。豪族を政府の官人として束ねるのを目指した。

冠は絹製で、縁飾りの付いた袋状。文献に位階ごとの色を示す記述は見当たらないにもかかわらず、上から「紫・青・赤・黄・白・黒」とする説がある。国学の発達した江戸時代に、陰陽五行説に基づいて有力視された。仁以下は人の守るべき徳を表す「五常」であり、五行説では該当する色が「青・赤・黄・

3

## 飛鳥時代の冠の色



吉岡常雄が復元した、藤原鎌足の「大織冠」(紫紅社提供)

冠位十二階は647年に七色十三階の冠位に改変された。位階を「織・繡・紫・錦・青・黒」として大小に分け、黒の下に「建武」があった。書紀はそ

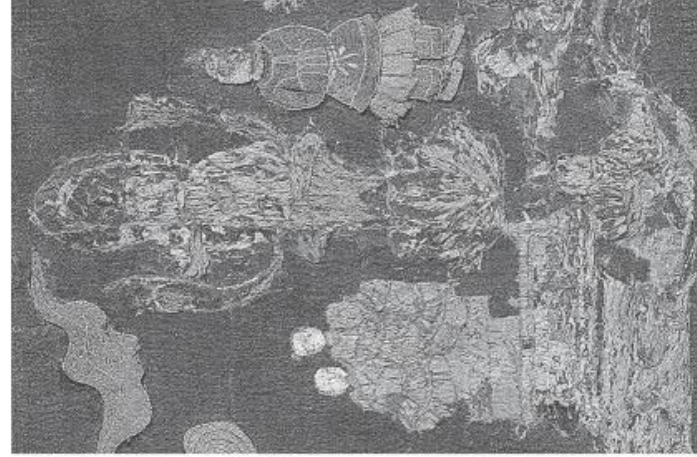
白・黒」である。よつて各冠にこの五色を当てはめたもので、この部分は蓋然性が高い。

ただ「徳」は五常になく、色を紫とする根拠もない。「日本書紀」には冠位十二階施行期間に、蘇我蝦夷が蘇我入鹿へ紫の冠を授け大臣の位になぞらえたところ。徳冠を授けられたのは遣隋使などとされ、強大な勢力を誇った蘇我氏が徳位と同色とは考え難い。十二階に分けられた官人たちの上に大臣らがおり、紫の冠をかぶったのだろう。

# 支配者層の序列を表示

の服色や冠の素材などを詳細に記している。位階がどう移行したかには異説もあるが、「徳」は「錦」になったと考えられる。その服色は、鮮やかな赤色である真緋。冠も同色とみられ、前身の徳冠も真緋であった可能性が高い。

染色家の吉岡常雄が1987年に復元した藤原鎌足(669



「天寿国曼荼羅繡帳」の一部(中宮寺所蔵、奈良国立博物館提供)

年死去)の冠は、当時の冠の形状をうかがわせてくれる。「吉岡常雄の仕事」(紫紅社)によると、鎌足の墓とされる阿武山古墳(大阪府高槻市)の棺にあった金の糸が冠の刺しゅう糸だと判明し、唯一授けられた「天織冠」とみて「深紫」に染め上げた。

色は識別手段として効果的

冠位十二階 (603年)	冠位	七色十三階 (647年)	冠位	服色	建武 (不明)
徳	大 小	織	大 小	深紫	建武
仁	大 小	繡	大 小	深紫	
礼	大 小	紫	大 小	浅紫	
信	大 小	錦	大 小	真緋	
義	大 小	青	大 小	紺	
智	大 小			緑	

### 初期の冠位制度

※西暦は制定年。増田美子編「日本衣服史」を基に作成

で、階級表示に使われるのは今にも通じる。相撲の行司の世界では、重配の房などの色で格の違いが表されるといふ。

飛鳥時代には他にも服装による権力表現があった。支配者層の男性の服は古墳時代と同様に、筒袖の上衣とズボン状の下衣からなるが、限られた高位層はスカート状の「褶」を着るよう命じられたと書紀は記している。

中宮寺(奈良県斑鳩町)所蔵の国宝「天寿国曼荼羅繡帳」は、聖徳太子が往生した「天寿国」を刺しゅうで表したもので、622年に制作された。当時の服装が反映されたとみられ、立姿の人物は縁飾りの付いた冠風のものをかぶり、脚衣の上に褶と考えられるものを重ねている。周りでひざまずく人々は褶状の服を着けず、階層の差を読み取れる。

(服飾史学者・増田美子)

まだ・よこ 1944年生まれ、岡山県出身。お茶の水女子大学大学院修士課程修了。学院女子大名誉教授

で、国際服飾学会会長などを歴任した。著書に「古代服飾の研究」「日本喪服文化史」など、纏著に「日本衣服史」などがある。